

次に「たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる」とあります。親が子をしつけるのと同じです。きつく叱ることもあります。それは愛情に裏打ちされたものです。また、叱ったあとで抱きしめたりすることによって、親の愛を示すこともあります。

それから「主は人の子らを、ただ苦しめ悩ませようとは、思っておられない」とあります。神様のみこころは決して苦しめ悩ますこと自体にはありません。忍耐をもって耐えていれば必ずそこから救い出してください。逃れる道を備えてくださるということがはつきりここに書かれています。

程度の差はあっても、私たちは長い人生の途上で耐えられないような悲しみ、苦しみを味わうことがあります。そのときに、これは必ず一時的なものであつて、祈りつつ耐え忍んでいれば必ず逃れの道が与えられるという確信をもつことができれば、大きな心の平安につながるのではないでしょうか。

メッセージ・36

最上の組み合わせ

そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

(ローマ人への手紙5章3、4節)

川崎洋という詩人の作品に「ほほえみ」という題の詩があります(『ほほえみにはほほえみ』(童話社)所収)。

この詩は、「ビールには枝豆」という言葉から始まって、「カレーライスには福神漬け」というように、それぞれいちばん合うものが挙げていきます。「アダムには」というものもあつて、私は「エバ」だと思つたのですが、「アダムにはいちじくの葉」だそうです。

そして最後に、ここがこの詩のいちばんのミンですけれども、「ほほえみにはほほえ

み」という言葉がでてきます。「ほほえみ」の最上の組み合わせはやはり「ほほえみ」だといふのです。

日常生活にはいろいろな組み合わせがあるものですが、私はこの詩を読んだとき、聖書の一節がすつと頭に浮かびました。それが冒頭の御言葉です。

ここに「患難」「忍耐」「練られた品性」「希望」という四つの言葉の組み合わせが出てきます。

(新共同訳聖書では「患難」の代わりに「苦難」、「練られた品性」の代わりに「練達」という言葉が使われています。私には「練られた品性」のほうがピッタリきます)

人生ではさまざまな苦難や患難が私たちを襲うわけですが、それを信仰をもって忍耐していれば、その忍耐によって品性が練られていく。そして、それが必ず希望に変わっていくということを教えてくださいます。

私はこの四つの中で「品性」という言葉が非常に好きで、「品性」というのはどういう意味だろうかとずっと考えてきました。

余談になりますが、大阪大学の私の同僚が「品の研究」というのをしています。人間にとって「品」とはどういうことなのかという研究です。彼は「これが品だ」というのはなかなか

か難しいが、少なくとも「これは上品でない」というのはすぐにわかると言っています。

まず大声でしゃべること。これは私も注意しなければいけません。それからしゃべるときに早すぎるというのも、どうも品を落とすようです。つまり、時と場合にもよりますが、ゆっくりと静かに話をするのが大切だということです。

もちろん「品」はいろいろな要素から成り立っていて、その人がもっている雰囲気や物腰も重要な要素です。ある会合で品のよさそうな方にお会いしましたが、口を開けた途端、早口で大きな声でしゃべられてびっくりしたことがあります。さっそく川柳を作りました。

「口開くまでは上品だった人」(新聞に投稿しましたが、残念ながら載りませんでした)

「品性」というのは、やはり思いが広くて、深くて、そして温かいという三つの要素が必要なのではないかと思えます。

苦難がきたときにしつかりとそれを耐える、ただし信仰をもって耐えるということが重要です。いつかこの苦難は解決されて、練られた品性を生み希望へつながっていくという信仰があれば、必ずその人の耐えている姿に品性が見えてくるのではないかと思うのです。

これからも苦難のなかに身を置かなければならないことがあると思いますが、そのような信仰をもつことができたならばうれしいと思えます。